

## 研究課題「『良港？新田？』校歌の謎に迫る」

三豊市立三野津中学校 1年 関 隼土・綾 直弥・田中 遥基

### 1. 課題設定の理由

三野津中学校校歌 1番  
入り江の広き 良港の  
昔を偲ぶ 新田に  
若き希望は みなぎりて  
友愛花と 咲き薫る  
三野津中学 ああ我ら  
学びの道に いそしまん

三野津中学校の校歌の一番には、「良港」や「新田」という歌詞があります。三野津は津嶋神社のあたりを除けば、海に面していない。ましてや、入り江があり、良港として利用されるような場所があるとは思えない。また、確かに水田は多いけど、新田という意味がよく理解できなかった。

そこで、この校歌の謎を解きたいと考え、研究を進めることとした。

### 2. 課題についての予想

そこで、私たちは3人で話し合っ、次のような予想(仮説)を立てた。

- (1) 三野町には、かつて広い入り江があり、香川県を代表する港があった。そして、入り江があったのは、きっと海水面が現在よりも高かったことが理由ではないだろうか。
- (2) しかし、その入り江が何らかの理由で、陸地となり、新しく水田になったのだろうか。陸地になったと言えば、きっと水田なので干拓が行われたのではないだろうか。

### 3. 研究の方法

- (1)文献調査Ⅰ「三野町誌」
- (2)聞き取り調査…市教育委員会 生涯学習課 塩冶琢磨さんより
- (3)文献調査Ⅱ「三野津湾干拓史」
- (4)地形図の利用…2万5千分の1の地形図「仁尾」
- (5)現地調査 ①古代の海岸線 ②中世の海岸線 ③干拓された新田



聞き取り調査の様子

### 4. 調査結果

(1)文献調査Ⅰ～「三野町誌」よりわかったこと～

#### ①「大見」の地名の由来について

大見は本来「大海」と呼ばれる地名が転じて大見となった。また、「塩見」と呼ばれる地名があるが、この塩見は、「潮見」という意味で、高台から潮の様子を見ることができるところが、その由来であった。このことから、三野町誌は、大見は「三野津湾を一望することのできる風光明媚」な集落であったと記録している。

#### ②「下高瀬」の地名の由来について

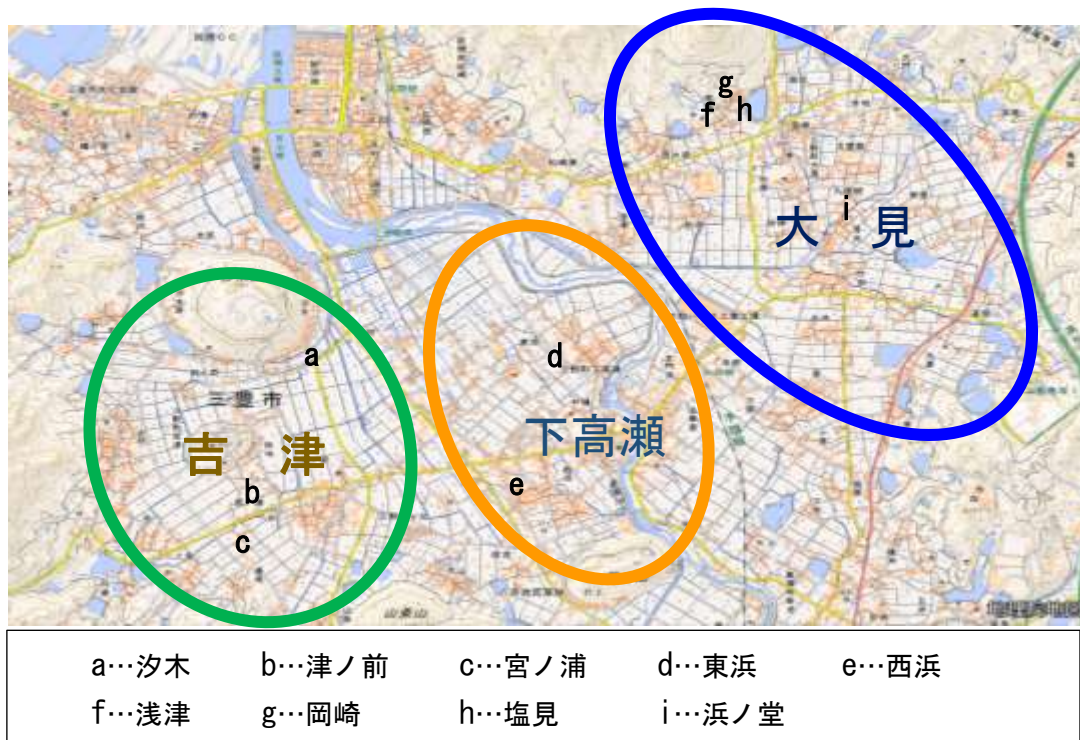
下高瀬は高瀬川の下流域という意味である。そして、名前の由来の箇所に下高瀬の歴史に津ついで記録があった。それは、かつての大部分は「三野津湾の海底」であったこと。そして、高瀬川が運んだ土砂によって三角州が形成されたこと。さらには干拓によって、美しい新田が広がっていったこと。

③「吉津」の地名の由来について

吉津はかつて「葭津」と表記されていて、葭(ヨシ)が生えた港という意味であった。それが縁起のよい「吉」という文字に置き換えて「吉津」と表記されるようになった。また、1167(仁安2年)に、西行法師が讃岐を訪れた時に、上陸したのがこの三野津港であった。

④「海」に関する地名について

三野町誌は、「海」に関係する地名として、「浜」(砂浜)・「津」(港)・「崎」(岬)・「浦」(入り江)、「塩」「汐」(潮)という漢字のつく地名を上げていた。実際にある地名としては、「東浜」・「西浜」・「浜ノ堂」・「津ノ前」・「浅津」・「岡崎」・「宮ノ浦」・「塩見」・「汐木」などであった。そして、これらの海に関する地名がある地点を結ぶことで、かつての三野津湾の海岸線を推測できると記述していた。しかし、この後の調査で、そう単純ではないことがわかってきた。



(2)聞き取り調査よりわかったこと

①対 象 … 塩冶 琢磨さん(三豊市教育委員会 生涯学習課)

②日時・場所 … 2018年8月9日 宗代瓦窯史跡公園・宗吉かわらの里展示館にて

③聞き取った内容

- 古代は宗吉瓦窯の近くまで三野津湾が広がっていた。
- 宗吉瓦窯で作った瓦を三津湾で船に乗せ、近畿地方まで運んでいた。
- 三野津湾が陸地になったのは、海水面の下降ではなく、高瀬川の土砂が堆積したことと、江戸時代の干拓が原因である。



当時の様子を予想した展示資料

※ 「三野津湾干拓史」という文献を貸していただいた。

### (3)文查Ⅱ～「三野津湾干拓史」(片山義隆氏著)よりわかったこと。

#### ①古代の海岸線について

古代の海岸線は、標高5メートルの位置と推定していた。その根拠としては、「津」や「崎」などの海に関する地名の分布、古代の両墓制の埋葬地の分布そして宗吉瓦窯などの遺跡や古墳の分布などをもとに判断したと書いていた。ただ、両墓制のことがよく分からなかったので、インターネットを活用して調べると、四国新聞社のホームページに次のように記載されていた。

「遺体を埋葬する墓(埋め墓)」と「靈魂を祭る墓(参り墓)」の二つの墓を作るならわしで、県内では塩飽諸島を中心に三豊・観音寺地区や仲多度郡などの一部の地区に偏在している。参り墓は集落のすぐ近くに作られ、埋め墓は海岸線や山の中腹といった集落から離れた場所に作られていた。

すなわち、古代の三野津では埋め墓の多くが海岸線にあり、そのことが古代の海岸線を考える根拠となっていることがわかった。

#### ②中世の海岸線について

中世については、寿永年代(1182-83年)の海岸線を推測していたが、標高な何メートルといった、はっきりとした基準はなかった。ただ、「吉津村村史」・「郷土史家宝泉(秋山家文書)」・「大日本地名文書」などの文献をもとに、著者が海岸線を推定していた。その海岸線を確認すると古代から中世にかけて高瀬川の運んだ土砂が堆積し、三角州を形成することで、古代よりも陸地の部分が増えていた。特に下高瀬地区では、正中年代(1325年)に秋山氏により建立された本門寺(法華寺)は海岸沿いに位置していたことや対岸の東浜の地には、「川尻」(河口部)という地名が残っていることがわかった。さらに、三野津中学校付近の小字を塩門地というが、これは新浜の塩田ではないかと推測している。また、大見地区では砂押では赤米が栽培されており、三野津湾からは鱈が多く取れたという記録が残っていた。

この著書では、中世から近世にかけての海岸線についても分析していたが、大きな変化は見られなかったことも確認した。

#### ③江戸時代の干拓について

江戸時代の干拓については、歴代の丸亀藩主によって干拓が進められたことがわかった。具体的には生駒氏が始めた干拓事業を、山崎氏そして京極氏へと受け継がれ、京極氏の時に干拓事業が完成したことがわかった。また、隣接する現・詫間町においても同時期に干拓が進み、松崎新田や的場新田も同じ時期に作られていたことがわかった。そして、1600年代に行われた干拓は全国的にみても早い時期の干拓であると記されていた。実際に歴史の教科書で、新田開発について調べてみると、徳川吉宗や田沼意次の頃に書かれていた。徳川吉宗が行った享保の改革は、1716年から始まっているので、三野町・詫間町の干拓事業はかなり早い時期のものであることがわかった。

また、三野町内にはおもに6つの干拓地(新田)が作られたが、作り始めた時期の記録はほとんどなく、完成した時期についての記録が中心であった。主なものをまとめて、一覧表を作成すると次のようになった。

年代	おもな記録
慶安9(1604)年	高瀬川右岸に堤防が築かれる。
元和8(1622)年	大見入り江の干拓が完成する。

寛文 2(1662)年	浅津新田が完成する。
寛文 10(1670)年	約 50 町の下高瀬新田が干拓される。
寛文 11(1671)年	吉津村新田の干拓が完成する。
元禄 10(1697)年	上新田・下新田の干拓が完成する。

(4)地形図を活用した調査～文献調査の内容を地形図上に記入する～

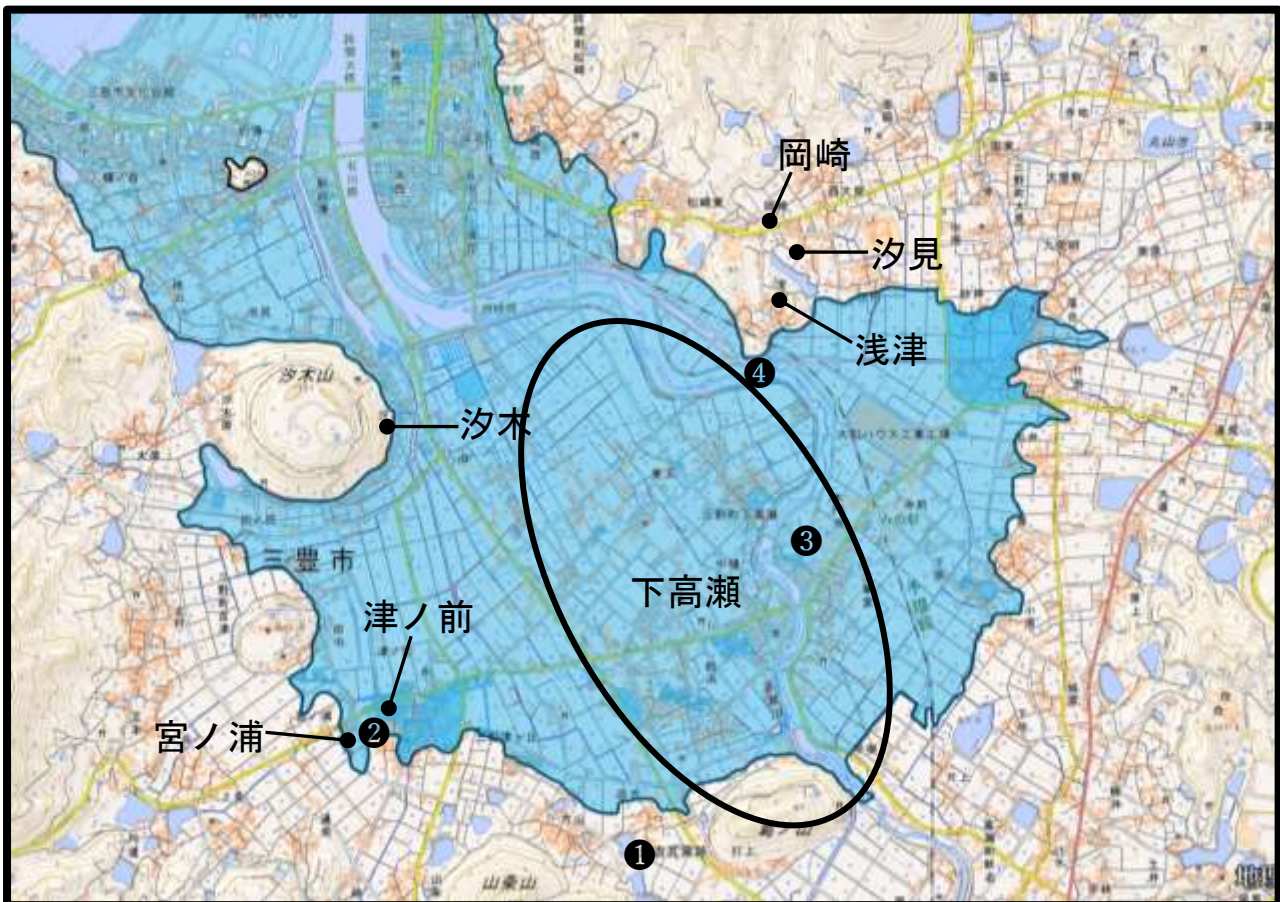
①古代の海岸線について

「三野津湾干拓史」が推定した標高5メートルの海岸線を、国土地理院の地形図に記入してみると、古代の広大な三野津湾の姿を確認することができた。そして、地形図に記入することで、三野町誌に記録されていた次のこともはっきりと確認することができた。

- ①宗吉瓦窯のすぐ近くまで、三野津湾がせまってきていること。
- ②西行法師が上陸した吉津の三野津港の場所が海岸線と一致していること。
- ③下高瀬の大部分は海底で、本門寺のあたりも海底であること。
- ④大見では、塩見とよばれる地名があった浅津地区は小高い岬となっていること。

また、この海岸線沿いには、海に関する地名である「汐木」「津ノ前」「宮ノ浦」「浅津」「塩見」「岡崎」といった地名を確認することができた。これらの地名は、古代に名づけられた歴史ある地名であることがわかった。

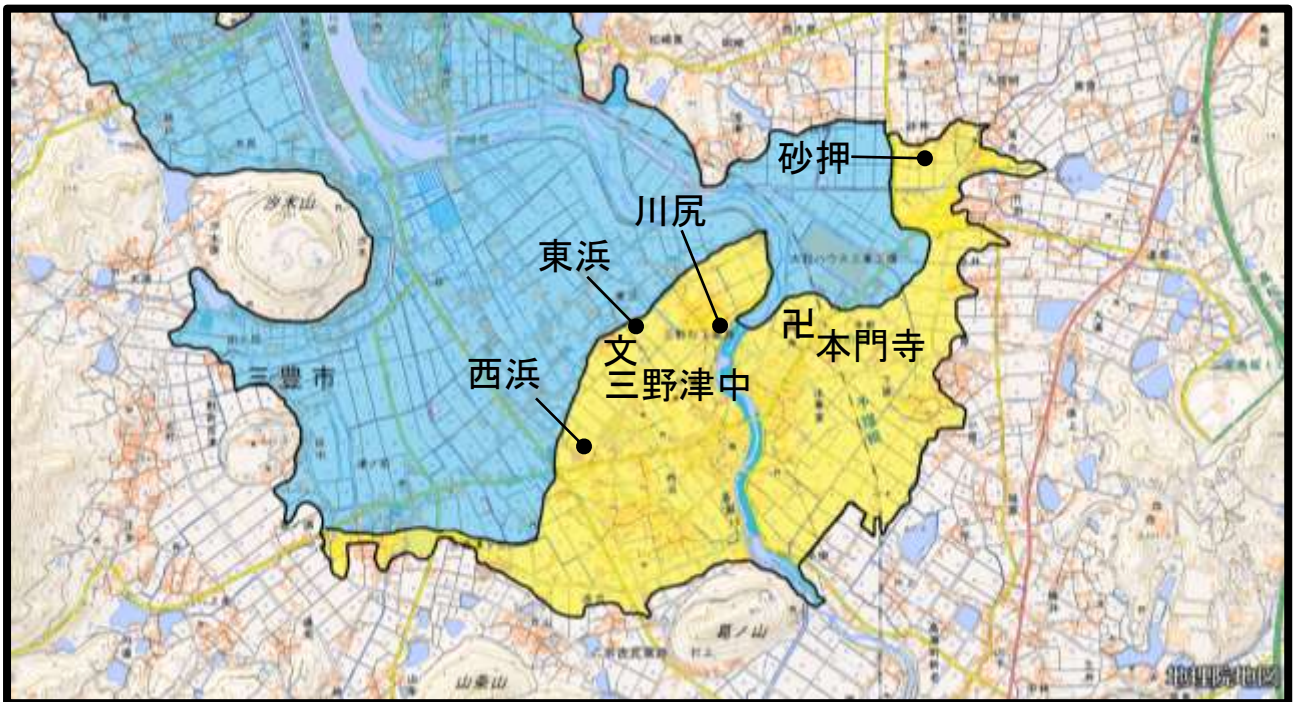
※逆に、「東浜」「西浜」「浜ノ堂」は古代の地名ではないことも確認できる。



## ②中世の海岸線について

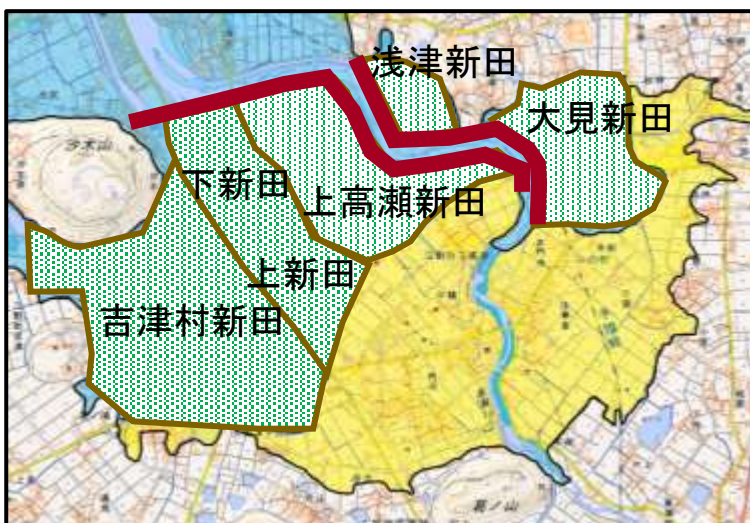
「三野津湾干拓史」が推定した図を、地形図に記入してみると、高瀬川が運んだ土砂が広大な三角州を形成し、陸地の部分が大きく拡大していることがわかった。

地区ごとに見ると、吉津は古代の海岸線とあまり大きな変化はないが、下高瀬は陸地の部分がかかなり増えていることがわかった。また、下高瀬には中世の海岸線の場所に東浜や西浜・川尻(河口の意)という地名があり、これらの地名は中世に名付けられた地名であることを確認できた。さらに、三野津中学校や本門寺ができる場所は海岸線付近にあることも確認できた。大見地区では、高瀬川以外の河川によって堆積した陸地を確認することができた。そして、その場所には土砂の堆積を意味すると考えられる砂押という地名があった。



## ③江戸時代の干拓について

「三野津湾干拓史」記す堤防および新田を記入すると次のようになった。



[大見の干拓について]

- ① 高瀬川右岸の場所に堤防を築く。
- ② 大見新田を干拓する。
- ③ 浅津新田を干拓する。

[下高瀬・吉津の干拓について]

- ① 高瀬川左岸の場所に堤防を築く。  
(このことは私たちの予想)
- ② 下高瀬新田と吉津村新田をほぼ同じ時期に干拓する。
- ③ 上新田・下新田を干拓する。

※なお、この時期には、詫間町でも松崎新田・的場新田が干拓されていた。

(4)現地調査～地形図と「三野津湾干拓史」を見ながら～

①古代の海岸線を巡る。



←①津ノ前(吉津)  
旧吉津小学校前の道路が標高 5メートルと推定される。ここより南は小高くなっていて、西行法師の上陸について記された石碑を確認することができた。

→②宗吉(吉津)

宗吉瓦窯より少し北の場所の水田の中に、古代の海岸線と推定される場所があった。ここが海岸であれば、瓦を船で運びやすいと実感した。



↑③平郷(下高瀬)

中世の高瀬川の河口部。対岸の葛ノ山のすそ野が海岸線になっていた。



↑④法華堂より南(下高瀬)

本門寺が建立される場所も海の中。下高瀬の大部分が海底であることを実感した。



↑⑤落合(大見)

かつての大見入江の最も奥の方の場所。こんなところまで海だったとは驚き。



↑⑥浅津(大見)

標高 5メートル以上の小高い集落。当時は海に面した岬であったことを想像した。まさに「大見」の地名の由来を感じさせる場所であった。

古代の海岸線を巡って、古代の三野津湾の広大さをはっきりと実感することができた。そして、校歌に出てくる「良港」が、津ノ前にあった三野津港であることも確認できた。

②中世の海岸線を巡る。



←①西浜(下高瀬)  
奥に見える葛ノ山周辺が古代の海岸線。高瀬川が運んだ土砂で、ここまで陸地となったことに驚いた。



←②東浜(下高瀬)  
三野津中学校が砂浜で塩田となっていたことを想像した。



↑③本門寺付近の高瀬川(下高瀬)

高瀬川の運んだ土砂でここまでが陸地となったことに驚き。東側に見える本門寺は当時海沿いだったことを想像。対岸の場所には川尻の地名が残り、河口部であったことを証明してくれる。



←④砂押(大見)

写真の川が運んだ土砂によって、ここまでが陸地となる。当時、浜ノ堂が砂浜に建っていたことや、写真奥が大見入江だったことを想像。



中世の海岸線を巡ることで、高瀬川が運んで陸地となった地域がいかに広大であるかを実感できた。また、有名な「はまんど」ラーメンの由来も、中世の海岸線と関係したとは、まさに驚きであった。

②江戸時代の新田を巡る。



↑①田中(吉津)

吉津小近くの古代・中世の海岸線を確認。その東側に広大な吉津村新田ができた。

↑②洲崎橋周辺(下高瀬)

高瀬川左岸の岸辺が干拓のための堤防であった。南には広大な下高瀬新田が広がっていた。



←③大見新田(大見)

干拓のため堤防が築かれた高瀬川右岸を確認。大見入江が大見新田となったのは、他の新田よりも早い時期であったことを、立地条件から実感できた。

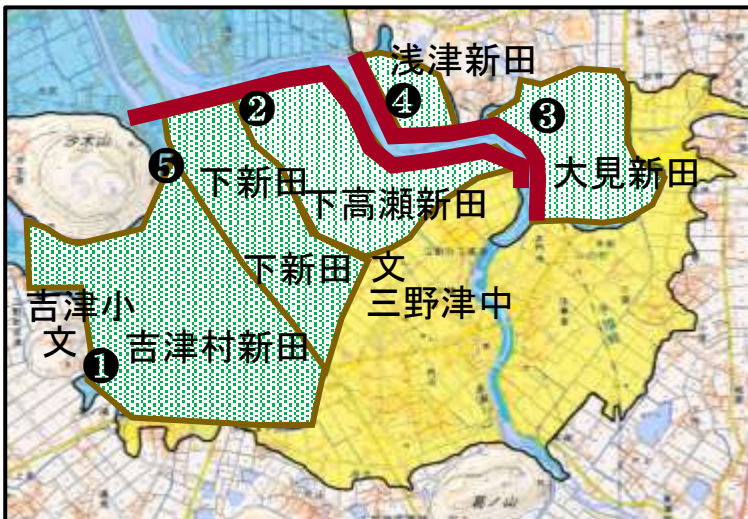


↑④浅津新田

大見新田の後、干拓された。

↑⑤汐木港近くの水路と汐木港の跡地

江戸時代の干拓後、中心となった港になったことを確認。



実際に現地調査を行うことで、新田や堤防を確認することができた。

校歌の歌詞に登場する三野町内の新田の広さを改めて実感した。当時の人々が実りの秋を喜ぶ姿を想像すると自然と笑顔になることができた。

また、この新田ができることで、港の中心は、津ノ前の三野津港から、汐木港に移り、明治時代に特に栄えたこともわかった。

## 5. 成果と新たなる課題

### (1)成果

- ① 古代と中世の海岸線の姿を、地形図をみながら現地を歩くことで、実感をもって確認することができた。
- ② 古代から中世にかけて高瀬川が多くの土砂を運んで三角州が形成され、下高瀬を中心に陸地の部分が拡大したことがわかった。
- ③ 歴代の丸亀藩主の指示によって、江戸時代の早い時期から干拓が進み、多くの新田が生まれ、ていったことがわかった。また、その新田や堤防を現地調査で確認できた。

### (2)新たなる課題

- ① 複数の文献を探して、調査の精度をもっと上げていきたい。
- ② 現地調査では、地形図だけではなく、GPS機能のついたアプリなどを活用すれば、より正確な場所を特定することができたのではないかと考えた。
- ③ 調査中に地域のお年寄りの方から、下高瀬新田では小舟を利用して水路から稲の刈り取りを行っていたという話を聞いた。そのため、干拓地での農業の様子について調べていきたい。